

物語作者〈紫式部〉への序章

——『紫式部日記』と他テキスト群との語彙用例数比較——

加 藤 直 志

はじめに

去る二〇〇八年、「源氏千年紀」を記念し、各地で様々な講演会や展覧会などが行われた。「源氏物語千年紀委員会」なる会も発足し、一大事業としての感を呈していた^①。

二〇〇八年を「源氏千年紀」とし、また、「源氏物語千年紀委員会」が十一月一日を「古典の日」と宣言した根拠は、『紫式部日記』の、藤原公任が紫式部のいる局に向かって戯れに語りかけたと言われる出来事が、寛弘五（一〇〇八）年十一月一日のことであったということによる。

左衛門の督、「あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」と、うかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。

物語作者〈紫式部〉への序章

（『紫式部日記』寛弘五年十一月一日、一六五頁）

『源氏物語』に関する事業を行う上での意義付けが、『紫式部日記』の記述内容によつて規定されたのだということを、まずは、改めて押さえておきたい。

無署名を原則とする当時の物語において、作者名が知られ、なおかつ、同一人物の手になるとされる『紫式部日記』や『紫式部集』が千年以上の時をこえて我々の前に伝存している状況は、人類史的に見ても稀有なことに違いない。本稿では、まず、このような状況の下、作者「紫式部」という存在を共通項として、『紫式部日記』と『源氏物語』とを結びつけようとしてきた、あるいは、そのような結びつけを避けようとしてきた、享受史・研究史を今一度、振り返り、その後、「パラテキスト論」^③や「広義のテキスト論」^④を参照しながら、物語作者〈紫式部〉に迫る可能性を探ってみた。

一、作者「紫式部」への関心

作者不明のテキストが多い平安期の物語にあつて、「紫式部」という作者名を記しつつ、『源氏物語』の執筆状況に言及しようとする言説群の存在は、すぐれて貴重な出来事といつてよい。まずは、これらの記述内容について、先行研究^⑤に導かれつつ、再確認していく。

紫の物語に宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。

（『更級日記』三四三頁）

『更級日記』には、「紫の物語」と書かれているのであつて、はっきりと「紫式部」とは書かれていないが、「物語の執筆者が宇治八宮の姫君達を宇治に住ませたのであらう」と読むことができる。『源氏物語』の執筆状況とまではいえないが、ここに、『更級日記』作者による、物語の執筆者への関心の萌芽が読み取れる。

十二世紀後半ごろになると、『今鏡』や『宝物集』などに、「紫式部墮地獄説」と呼ばれる言説群を見ることができるようになる。これらは、『源氏物語』の作者が「紫式部」であることを前提としなければ生まれないわけであるが、ここでは「紫式部が『源氏物語』を書いた」とはつきり記述されているものに限って、引用しておく。

「紫式部とぞ世には申すなるべし」といふに、「それは名高くおはする人ぞかし。源氏といふめでたき物語つくり出だして、世に類なき人におはすれば、いかばかりの事どもか聞きもち給へらむ。」（『今鏡』・序、三十二頁）

紫式部が虚言をもつて源氏物語をつくりたる罪によりて、地獄におちて苦患しのびがたきよし、

（『宝物集』巻第五、二二九頁）

『今鏡』や『宝物集』には、「紫式部」が『源氏物語』を執筆したということがはっきりと記述されているが、『紫式部日記』への言及はない。

同じく、十二世紀後半ごろの成立かといわれる『水鏡』において、『紫式部日記』への言及を見ることが出来る。

紫式部が源氏などかきて侍るさまはただ人のしわざとやはみゆる。されどもそのときには日本紀の御つばねなどつけてわらひけりとこそは、やがて式部が日記にはかきてはべめれ。

（『水鏡』・跋、四五二頁）

「紫式部が源氏などかきて侍るさま」への関心と「式部が日記」とを関連付けている点で、興味深い。

『水鏡』とほぼ同時代の成立といわれる『無名草子』も、『源氏物語』の執筆状況と『紫式部日記』とを関連づけて語っている。

『源氏』を作りたりけるとこそ、いみじくめでたくはべれ」と言ふ人はべれば、また、「いまだ宮仕へもせで、里にはべりける折、かかるもの作り出でたりけるによりて、召し出でられて、それゆゑ紫式部といふ名はつけたり、とも申すは、いづれかまことにてはべらむ。その人の日記といふものはべりしにも、『中略』などこそ見えてはべれ。君の御ありさまなどをば、いみじくめでたく思ひきこえながら、つゆばかりも、かけかけしぐ慣らし顔に聞こえ出でぬほどもいみじく、また、皇太后宮の御事を、限りなくめでたく聞こゆるにつけても、愛敬づき、なつかしくさぶらひけるほどのことも、君の御ありさまもなつかしくいみじくおはしましし、など聞こえあらはしたるも、心に似ぬ体にてあめる。(後略)」

(『無名草子』二七七―二七八頁)

「源氏を作りたりける」事情への興味に加えて、「その人の日記」を通して、「つゆばかりも、かけかけしぐ慣らし顔に聞こえ出でぬほどもいみじく」、「心に似ぬ体にてあめる」などといった「紫式部」の人物像への関心が見られる。ただし、『紫式部日記』を読むことが『源氏物語』の読みへとつながるという発想は、ここからは読み取れない。

鴨長明による『無名抄』には、赤染衛門と和泉式部との比較にお

いて、「紫式部が日記」への言及が見られるものの、あくまでも歌人の比較をする際の史料としての紹介に過ぎない。

歌の方は(引用者注・和泉)式部左右なき上手なれども、身のふるまひもてなし、心持ちなど、赤染には及び難かりけるにや、紫式部が日記といふ物を見侍りしかば、「和泉式部はけしからぬ方こそあれど、(後略)」

(『無名抄』式部赤染劣事 八十頁)

この他に、古注釈類にも、『紫式部日記』への言及が散見される。例えば、『河海抄』には、五例を数えることができるが、それらは、『水鏡』のような執筆状況への興味か、『無名抄』のような史料としての参照に留まる。^⑦

光源氏物語は紫式部が製作也云々は今案之儀歟作者紫式部寛弘六年ノ日記ニ源氏物語の御前にあるをよませ給とあり

(『河海抄』巻第一・料簡、一八七頁)

さがりばかたのほどこいときよげに 下場也勘文 紫式部假名記にも此詞あり

(『河海抄』巻二・空蟬、二三三頁)

あてき 紫日記ニ上東門院の上童に此名あるよしみえたり

(『河海抄』巻第五・葵、二九二頁)

式部かやうにてや 紫式部(が)日記に式部もと殿の宣旨としおひたる人なりとみえたり

〔河海抄〕巻第五・賢木、三〇一頁

二月のなかの十日あまりばかりのあをやぎのわづかにしだりはじめたらん心ちして（中略）紫記云小少将の君はそこはかなくあてになまめかしく二月ばかりのしだりやなぎのさましたり

〔河海抄〕巻第十三・若菜下、四八四頁

ここまで引用した言説群からは、「紫式部」の人物像にわずかに言及した『無名草子』を除き、『源氏物語』の執筆状況を問題にする際に、作者「紫式部」に触れたに留まるものや、『紫式部日記』を平安時代の史料として用いたものなどが中心であったことがわかる。『栄花物語』による『紫式部日記』引用もまた、後者に属する。

ところが、元禄時代の水戸の国学者、安藤為章は、その著書『紫家七論』（一七〇三年刊）において、『紫式部日記』を読み、「紫式部」の人格面を積極的に明らかにすることで、『源氏物語』を読み解こうと試みた。

ここにいにしへより、源氏物語を論ずる人、ただ紫式部が英才をのみ称して、その実徳をいはざれば、物語の本意もあらはれがたく、式部がためにも物うきことなり。為章つらつら物語と、紫日記とを見て、その気象をはかり、その実徳を考るに、やまとは似る人もなく、才徳兼備の賢婦なり。

〔紫家七論〕其一 才徳兼備、二〇八頁

物語と日記とをよく見て其気象をはかるに、式部はいはゆる甚しき事をせざる人なり。

〔紫家七論〕其四 文章無双、二一八頁

『源氏物語』の執筆動機が、「諷諭」であるとは度度も主張するなど、儒学思想の影響による限界もいわれるものの、『源氏物語』を論じる際に「紫式部日記」を通して物語作者紫式部の〈内面〉に「寄り寄」ろうとした点で、新たな境地を切り開いたといえる。

以来、現在でも、『源氏物語』研究書の多くが、「紫式部」といった項目を立てたり特集を組んだりしており、その際に「紫式部日記」や『紫式部集』^⑩が引用されることも特に珍しいことではないといえよう。

二、近年の「紫式部」研究

『紫家七論』以降、近代に入っても、『源氏物語』は、作者「紫式部」への関心とともにあった。しかしながら、〈物語音読論〉から〈草子地論〉、〈語り論〉などを経て、〈テクスト論〉へと至る近年の『源氏物語』研究は、「作者の死」^⑪を受け入れ、作者「紫式部」と距離を置く方向で進展してきたし、そのような研究姿勢が多くの特長を研究成果を生み出してきた。

では、『紫式部日記』と「紫式部」の関係はどうであろうか。前

節で見たように、『紫家七論』以降、「紫式部」に言及する多くの論がその根拠を『紫式部日記』（や『紫式部集』）の記述に求めているし、『紫式部日記』そのものを論じる場合でも、「紫式部の…」などという言説が見られるが、それらがテキストに内在する語り手を指すのか、実在した生身の人間を指すのかは不分明な場合も多い。その点からすると、作者と作品とを切り離して論じようとする、『源氏物語』研究の状況とは一線を画し、作者「紫式部」と作品『紫式部日記』とを連続的なものとして捉えているようにも思われる。

「日記文学」が少なくともその出発点に「日記」との連続を持っている^⑬という特徴、つまり、日記文学は歴史的事実に基づいているという認識や、叙述の主体が「紫式部その人に収束してゆく」^⑭という『紫式部日記』の文体の特徴が、作者「紫式部」と『紫式部日記』とを一体のものとして扱おうとする背景にあると思われる。とはいえ、作者「紫式部」を共通項として、『源氏物語』までもを関連づけて論じる研究は、希少なものとなっていたと言えよう。

『源氏物語』研究における〈テキスト論〉の先駆者の一人とも言うべき、三谷邦明は、『源氏物語』と『紫式部日記』を安易に関連づけることには警鐘を鳴らしつつも、「二つの作品は〈作者〉という点で絆を結びつけることができる可能性がある」^⑮とも述べた。では、その「可能性」とは、どのようなものであろうか。以下、最近

の研究を参照しつつ、検討したい。

陣野英則は、「御冊子^{みさうし}づくり」（一六七頁）として、『紫式部日記』でも語られる「書写行為」こそが『紫式部日記』と『源氏物語』の「接点」となり、かつは物語世界と現実世界との接点となったのである^⑯。その接点のあたりに紫式部という物語作家が位置している^⑰といい、『源氏物語』と『紫式部日記』とをつなぐ可能性に言及した。

陣野の論考では直接には触れられてはいないが、「物語世界と現実世界との接点」への関心は、ジェラルド・ジュネットの「パラテキスト」概念とも重なり合う。

テキストはほとんどの場合、それ自体が言語的な、もしくは非言語的ないくつかの生産物、たとえば作者名、タイトル、序文、挿絵などを伴い、かつこれらに補強された姿でわれわれのもとに現れる（中略）テキストの観念性には、書字的にせよ音声的にせよ、物質性が部分的に付加される^⑱

陣野が、「物語作家」を「現実世界に存在した、生身の人間」^⑲と規定したことと、「物質性が部分的に付加され」たというジュネットの間には差異も読み取れるものの、「スイユ (seis)

語で「敷居」を表すことから、「物語世界と現実世界との接点」に位置する作者（紫式部）を「パラテキスト」の一つとして位置付ける可能性も考え得るだろう。

ジュネットの「バラテクスト」論を受けたものとして、安藤徹の「バラテクスト・オーヴァーテクスト論としての〈紫式部〉論」²¹がある。スミエ・ジョーンズによる術語である「オーヴァーテクスト」とは、「不可変の真理の存在を期待せず、表徴は読みによって姿を変えるばかりでなく、読みによってしか存在しない」という概念である。「バラテクスト・オーヴァーテクスト論としての〈紫式部〉論」とは、物語作者〈紫式部〉を読み取ろうとする、読者による読書行為の側により力点を置き、そのような読みが生まれるメカニズムを明らかにしようとするものと言い換えられそうである。

また、高橋亨は、「バラテクスト」を含む「広義のテクスト論」²²を参照しつつ、「バラテクストとしての〈紫式部〉を根拠とし、『源氏物語』と『紫式部日記』そして『紫式部集』のインターテクスト関係から、表現主体としての〈作者〉のことは（表現）と思考を考察することは有効であると思われる。」と述べている。

『紫家七論』に端を発した、作者「紫式部」の人格面から『源氏物語』に迫ろうとする作家論的実証主義から、「読者の誕生は、「作者」の死によってあがなわれなければならない」²³とする〈テクスト論〉を経て、再び、作者の存在を見直そうとする動きが始めているのが、ここ数年の、『源氏物語』と『紫式部日記』、そして作者〈紫式部〉に関わる研究の動向である。

作家論的実証主義から、〈テクスト論〉へと至る、方法論の変遷を踏まえた上で、テクストの解釈は、作者か読者かのどちらか一方からではなく、両者の対話により産み出されるというのが、松澤和宏の「広義のテクスト論」である。

テクストの解釈は、文脈1（引用者注・著者の地平）を背後に控えるテクストと新たな文脈2（引用者注・読者の地平）を背負った解釈者との不断の対話であり、テクストを通じた他者理解の営みが自己理解の深化を同時にもたらすことが判明してくるであろう。言い換えれば、テクストはオリジナルな文脈に緊密に留められていると同時に新たな文脈に開かれており、この根源的な二重性がテクスト解釈に対話的な性格を本質的に刻印していると言える。²⁵

本稿は、これらの研究を踏まえて、『源氏物語』と『紫式部日記』との関係性の中から浮かび上がってくる、物語作者〈紫式部〉を論じる可能性を模索する試みである。物語作者〈紫式部〉は、テクストと現実との境界に位置しながら、テクストの読解を通して、我々読者にその存在を意識させる。読者によるテクストの解釈以前に存在する、生身の人間である作者「紫式部」とは、「部分的に」重なりつつも、読者によるテクスト解釈の結果、浮上してくる存在であるという点、存在そのものが「敷居」とも言い得る存在である。物

語作者（紫式部）は、（狭義の）テキスト（本文）と別に存在するものではなく、両者を、「広義のテキスト」として包括的に捉えながら、読み解いていきたい。

例えば、我々が、物語作者（紫式部）に出会う場面として、「日本紀の御局」のあだ名の場面があげられる。

内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上人などにいひ散らして、日本紀の御局とぞついたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つつみはべるものを、さるところにて才さかし出ではべらむよ。

（『紫式部日記』二〇八頁）

「この人」とは、「源氏の物語」の執筆者であり、「字才をひけらかすようなことはしない」と言っている人物を指すと読める。日記文学には、単なる心情の吐露というだけではない、「世間に対する自己主張」が込められているといったのは、増田繁夫であるが、この場面からは、自分こそが、帝をはじめ、宮中の話題を席巻している「源氏の物語」の作者であると、読者に訴えるかのように書く、「この人」の存在を感じ取ることができるはずである。また、このテキストに付された題名が、『紫式部日記』であることを我々は知って

いるわけであり、「この人」は、『源氏物語』の作者としてその名を知られる「紫式部」であるということも読者の脳裏に浮かぶ。物語作者（紫式部）の存在が現前してくるのである。

次節では、物語作者（紫式部）論に進む前段階として、『紫式部日記』と『源氏物語』とを関連づけて論じる際の問題点に触れ、その後、関連する調査報告を行う。

三、『紫式部日記』と他テキスト群との語彙用例数比較の試み

『紫式部日記』と『源氏物語』、『紫式部集』を比較し、共通点や相違点を探り、そこから、作者「紫式部」に迫ろうとする研究は、これまでも存在したし、その成果は、我々に多くの示唆を与えてくれている。しかしながら、『紫式部日記』と『源氏物語』だけを比較して、共通点を見つけて、「これが紫式部の方法である」と主張する、あるいは、相違点を見つけて、「これは日記と物語の違いである」と指摘したところで、同じ平安時代の日本語で書かれたものである以上、共通点も多いであろうし、書かれている内容が異なる以上、相違点も無限に存在してしまうという、論じる上での困難さがつきまとう。

この問題を少しでも解決しようとしたのが、『栄花物語』が『紫

『式部日記』を書き換えた箇所に注目し、『紫式部日記』と『源氏物語』との共通点・相違点を指摘することで、紫式部固有の要素に迫ろうとした池田節子である。

『源氏物語』の表現の特徴はいろいろに論じられ、確かに、それが特殊であることは実感される。しかし、それを、『紫式部日記』や他の平安時代の作品と比較することによって、相対化してとらえないことには、『源氏物語』の表現の特殊性を真に理解したことにはならないであろう。^②

『紫式部日記』と『源氏物語』を、平安時代のテキスト群のなかに置いた上で、『紫式部日記』と『源氏物語』との関係を「相対化」するべきだという。池田が「紫式部」をどう規定しているのかについての言及はないものの、「紫式部固有のもの」に繋がる可能性に触れた論である。

本稿では、他のテキスト群との比較から、『紫式部日記』と『源氏物語』だけに共通する要素を読み取ることで、物語作者（紫式部）に迫るヒントを得られる可能性があると考え、『紫式部日記』から、解釈が問題になっている語彙やあまり一般的ではないと思われる語彙を集め、『紫式部日記』や『源氏物語』以外のテキストも含めて、その用例数を比較してみた。後期物語や和歌集などの用例も調査する必要があるが、まずは、『紫式部日記』『源氏物語』よ

りも以前に成立したとされる、散文・仮名テキストを対象として調査を行った。

調査に使用したそれぞれのテキストが、幾度もの書写を経た転写本に、現代の研究者が校合を加えた活字本であること、さらには、複数作者説の存在なども考慮すると、そこから浮上する、物語作者（紫式部）も、複数の人間の書写行為や読みの重なり合いの上に浮かび上がってくる存在といえる。また、語彙の選別基準が主観的であるため、今回の調査結果だけで、何らかの結論を出そうというつもりもない。だが、論の入り口として、まずは調査を行い、結果を、【資料】「『紫式部日記』と他テキスト群との語彙用例数比較表」としてまとめてみた。

比較表全体からは、『紫式部日記』に用いられている語彙と共通した語彙を最も多く含んだテキストは、『源氏物語』であったという、いわば予想通りの結果に帰結したわけだが、問題は、個別の語彙をそれぞれのテキストの文脈に戻した上で、『紫式部日記』と『源氏物語』にのみ共通する要素と物語作者（紫式部）の存在をどう読み解いていくべきかということにある。

おわりに

作者に関する情報が乏しい平安期の物語を論じる際、作者のこと

を知らなくても、作品を論じることができるという意味で、「作者の死」は、画期的な出来事であったといえよう。また、作者に関する情報がある程度分かっている、『源氏物語』においても、『テクスト論』の導入によって、多くの優れた研究成果が生み出されてきたとはいえ、そのことと、作者「紫式部」の存在を置き去りにすることとは必ずしも同義ではないはずである。

本稿では、まず、作者「紫式部」への関心が、諸テクスト群において、どのように記述されてきたかを概観し、安藤為章の出現と〈テクスト論〉の導入が、「紫式部」研究における大きな分岐点となっていることを、再確認した。その後、「パラテクスト論」や「広義のテクスト論」を参照しながら、物語作者〈紫式部〉を読み取っていく可能性を探ってみた。『紫式部日記』に書かれている「この人」が、『源氏物語』の作者であること、「この人」と書かれているテクストの題名に「紫式部」という名が付されていることなどから、現前してくる存在を、物語作者〈紫式部〉として捉え直したい。

さらに、本稿の最後では、他の平安時代のテクスト群と併置しつつ、『紫式部日記』と『源氏物語』の関係を相対化することを目指し、『紫式部日記』中の注目すべき語彙の用例数を比較してみた。この結果を参照しつつ、個別の語彙を、再び、それぞれのテクストの文脈に戻した上で、物語作者〈紫式部〉の問題に迫っていかない

かと考えている。今後の課題としたい。

注

① 「源氏千年紀」関連の企画については、源氏物語千年紀委員会編『源氏物語千年紀記念 源氏物語国際フォーラム集成』（二〇〇九年、源氏物語千年紀委員会発行）及び、伊井春樹「源氏千年紀―各界の動向 イベント」（『国文学』第五十二巻九号、二〇〇七年八月から、第五十三巻十七号、二〇〇八年十二月）を参照。

② 紫式部の実名に関する諸説については、上原作和「ある紫式部伝 本名・藤原香子説再評価のために」（『光源氏物語 学藝史 右書左琴の思想』二〇〇六年、翰林書房。初出は、南波浩編『紫式部の方法』二〇〇二年、笠間書院）などに詳しいが、本稿においては、実名よりも、「紫式部」という呼称が、作者名としての機能を担ってきたことを重視する。

③ ジェラルド・ジュネット『スイユ テクストから書物へ』（和泉涼一訳、二〇〇一年、水声社）。ジュネットによれば、「パラテクスト」とは、「作者名、タイトル、序文、挿絵など」の「テクストに伴う生産物」のことをいう。

④ 松澤和宏「闇のなかの祝祭——なぜ草稿を読むのか——」（『生成論の探究』二〇〇三年、名古屋大学出版会。初出は、『文学』季刊、第二巻第二号、一九九一年四月）。松澤は、「テクスト、間テクスト、パラテクスト、メタテクスト、前テクストは、流動的な相依相関の下に置かれている（中略）広義のテクストとは、こうした布置に漲る力学に促された言葉の運動体に冠せられた総称」という。テクストを自律したものではなく、パラテクスト（作者名、題名など）や、メタテクスト（注釈など）などととも布置されている存在として捉える発想である。

- ⑤ 安藤為章『紫家七論』、岡一男『源氏物語の基礎的研究』（一九五四年、東京堂）、萩谷朴『紫式部日記全注釈 下巻』（一九七三年、角川書店）
『解説／紫式部日記』の享受者たち、今井源衛『人物叢書新装版 紫式部』（一九八五年、吉川弘文館）『源氏物語』の享受と紫式部観の変遷、安藤徹『物語作者の自己成型』（『源氏物語と物語社会』二〇〇六年、森話社。初出は、王朝物語研究会編『研究講座 王朝女流日記の視界』一九九九年、新典社）、高橋亨『物語作者のテクストとしての紫式部日記』（『源氏物語の詩学 かな物語の生成と心的遠近法』二〇〇七年、名古屋大学出版会。初出は、注②の南波浩前掲書）など。
- ⑥ 用例の検索には、玉上琢彌編、山本利達・石田稜二校訂『紫明抄・河海抄』（一九六八年、角川書店）の索引を用いた。『河海抄』本文の引用も同書に拠った。
- ⑦ 萩谷朴は、この点について、「単なる用語例としての効果をしか求めていない」と指摘している（注⑤前掲書）。
- ⑧ 今井源衛『人物叢書新装版 紫式部』（注⑤前掲書）、野口武彦『もののまざれ』と『もののあはれ』——萩原広道『源氏物語評釈』の「惣論」をめぐる（『源氏物語』を江戸から読む）一九九五年、講談社。初出は、『書物の窓』一九八一年一月、有斐閣。
- ⑨ 安藤徹『物語作者の自己成型』（注⑤前掲書）。安藤は、『紫式部日記』の注釈書の登場が『紫家七論』以後である「ことも指摘している」。
- ⑩ 『源氏物語』研究史において、『紫式部日記』への言及や引用が古くから行われているのに対して、『明治以前においては、紫式部集は一部の人びとの間で書写され、読まれてはいたが、これについて多少でもまとまった論及をしたものはほとんど無かった』（南波浩『紫式部集の研究 校異篇・伝本研究篇』一九七二年、笠間書院、「第一章 紫式部集研究の史的概要」という。『紫式部集』には、「日記歌」を除き、『源氏物語』に関する記述がないことが大きな要因かもしれない。
- ⑪ 高田祐彦『源氏物語研究の課題』（秋山虔編『別冊国文学 新・源氏物語必携』一九九七年、学燈社）などを参照。
- ⑫ ロラン・バルト『作者の死』、「作品からテクストへ」（『物語の構造分析』花輪光訳、一九七九年、みすず書房）。
- ⑬ 高田祐彦『王朝日記』（『国語と国文学』第八十四巻第五号、二〇〇七年五月）。
- ⑭ 上野英二『紫式部における日記と物語』（『成城国文学論集』第二十輯、一九九〇年三月）。
- ⑮ 三谷邦明『物語と（書くこと）——物語文学の意味作用あるいは不在の文学——』（『物語文学の方法Ⅰ』一九八九年、有精堂。初出は、『日本文学』第二十五巻十号、一九七六年十月）。
- ⑯ 陣野英則『物語作家と書写行為——『紫式部日記』の示唆するもの——』（『源氏物語の話しと表現世界』二〇〇四年、勉誠出版。初出は、『国文学研究』第二二九集、一九九九年十月）。
- ⑰ 注⑯末尾の【補注】において「バラテクスト」という語を見ることができが、自身の論考との関わりについては、直接には言及がない。
- ⑱ 注③前掲書、「序論」。
- ⑲ 陣野英則『紫式部という物語作家——物語文学と署名——』（注⑯前掲書。初出は、河添房江・神田龍身・小嶋菜温子・小林正明・深沢徹・吉井美弥子編『叢書 想像する平安文学 第8巻』二〇〇一年、勉誠出版）。
- ⑳ 安藤徹『源氏物語』のバラテクスト」（『源氏物語と物語社会』（注⑤前掲書）。初出は、注②の南波浩前掲書）。
- ㉑ スミエ・ジョーンズ『江戸文学のオーヴァーテクスト——戯作新論に向けて』（『江戸文学』第二十号、一九九九年六月）。

②③ 注④に同じ。

②④ 高橋亨「物語作者のテキストとしての紫式部日記」(『源氏物語の詩学』(注⑤前掲書))。

②⑤ ロラン・バルト「作者の死」(注⑥前掲書)。

②⑥ 松澤和宏「テキスト布置の解釈学」の理論的素描の試み」(『HER-SELEC テキスト布置の解釈学的研究と教育』第三巻第二号、二〇〇九年)。「広義のテキスト論」と「テキスト布置の解釈学」は、ほぼ同じ概念と思われる。

②⑦ 増田繁夫「自己主張の季節——平安女流日記文学史のこころみ——」(『文学』季刊、第二巻第三号、一九九一年七月)。

②⑧ 池田節子「紫式部の言葉——『源氏物語』紫式部日記『栄花物語』を比較して——」(『源氏物語表現論』、二〇〇〇年、風間書房。初出は、『国文学解釈と鑑賞 別冊 文学史上の『源氏物語』一九九八年六月)。

【引用本文】

『紫式部日記』『更級日記』『無名草子』は「新編日本古典文学全集」(小学館)に、『無名抄』は「日本古典文学大系」(岩波書店)に、『宝物集』は「新日本古典文学大系」(岩波書店)に、『水鏡』は、金子大麓・松本治久・松村武夫・加藤歌子『水鏡全注釈』(一九九八年、新典社)に、『今鏡』は、竹鼻績『講談社学術文庫 今鏡(上)』(一九八四年、講談社)に、『紫家七論』は、秋山虔監修、島内景二・小林正明・鈴木健一編集『批評集成・源氏物語 第一巻 近世前期篇』(一九九九年、ゆまに書房)に、それぞれ拠り、適宜、表記等を改めた。また、引用文中の傍線は、引用者によるものである。

【付記】

本稿の一部は、二〇〇一年度古代文学研究会大会(二〇〇一年八月八日、於・同志社びわこリトリートセンター)における口頭発表をもとにして
いる。席上、多くの方から様々な意見を頂戴した。御礼申し上げます。

【資料】『紫式部日記』と他テキスト群との語彙用例数比較表
凡例

①用例数の確認に用いた索引

・西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記総合語彙索引』一九九六年、勉誠社。

・柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『新日本古典文学大系別巻 源氏物語索引』一九九六年、岩波書店。

・上坂信男『九本対照 竹取翁物語語彙索引』一九八〇年、笠間書院。

・西端幸雄・木村雅則『歌物語 伊勢物語・平中物語・大和物語総合語彙索引』一九九四年、勉誠社。

・松尾聰・江口正弘『落窪物語総索引』一九六七年、明治書院。

・室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲貝直子・志甫由紀恵・中村一夫『うつは物語の総合研究 本文編上／索引編自立語2』一九九九年、勉誠出版。

・榊原邦彦『枕草子 本文及び総索引』一九九四年、和泉書院。

②名詞については、その名詞の前後に、「御」や「一」が付いていても、同一の語とみなした。

③『紫式部日記』『源氏物語』よりも以前に成立した、散文・仮名テキストを対象にしたが、『更級日記』については、『紫式部日記』などと同じ索引で同時に調べることができたため、調査対象に加えた。

更級 日記	和泉式部 日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	蜻蛉日記	うつほ物語	平中物語	大和物語	土佐日記	伊勢物語	竹取物語	紫式部日記	(新大系／ 新全集の ページ数)	資料—①
3	3	353	6	5	1	6	0	0	0	0	0	20	253／123	けはひ
1	0	8	2	4	1	3	0	0	2	0	0	2	253／123	入りたつ
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	253／123	はかなき物がたり
0	0	18	0	1	2	2	0	0	0	0	0	1	253／123	現し心
4	1	31	3	1	0	3	1	0	0	3	0	1	253／124	夜ふかし
1	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	253／124	をぐらし
0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	253／124	いひしろふ
0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	253／124	時（じ）
0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	254／124	遠く近く
0	2	68	9	2	5	4	0	0	0	0	1	5	254／124	おどろおどろし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	254／124	とどろ
0	0	8	1	0	0	3	0	0	0	0	0	1	254／124	うちつれたる
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	254／125	女郎花さかりの色
1	0	89	3	12	7	23	0	3	0	3	1	5	255／126	心ばへ
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	255／126	うち思ひ出づ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	256／127	読経あらそひ
0	0	7	0	3	1	0	0	0	0	0	0	1	256／127	わざとの
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	256／127	中絶え
1	0	48	0	1	0	12	0	0	0	0	0	2	256／127	しめやかなり
0	0	1	0	0	0	7	0	0	0	0	0	2	256／128	まろがす
0	0	4	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	256／128	うちめ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	256／128	まくらす
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	256／128	口おほひ
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	256／128	見あく
2	1	9	8	5	5	6	0	0	0	0	0	1	256／128	もの狂ほし
0	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	256／128	うち赤み
0	0	46	2	2	0	6	0	0	0	0	0	3	257／129	とりわきて
12	15	639	43	57	35	145	14	2	3	6	6	18	257／129	けしき
0	0	53	0	1	0	6	0	1	0	0	2	2	258／130	しつらひ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	258／130	もてちがふ
0	0	8	5	1	1	2	0	0	3	0	0	1	258／130	日ひと日
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	258／130	かりうつす
0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	258／130	耳ふりたつ
2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	258／130	たちさわぐ
0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	258／131	ひきつばぬ
0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	259／131	気あがる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	259／131	ぬこむ
0	0	11	0	1	1	10	0	0	0	0	0	1	259／132	泣きまどふ
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	259／132	おしかさぬ
0	0	9	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	259／132	加持まゐる
0	0	1	4	1	0	3	0	0	0	1	0	2	259／132	おしいる

更級日記	和泉式部日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	蜻蛉日記	うつほ物語	平中物語	大和物語	土佐日記	伊勢物語	竹取物語	紫式部日記	(新大系／新全集のページ数)	資料—②
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	259／132	かうな
0	0	6	0	0	5	1	1	0	0	0	0	1	259／132	せきあふ
0	0	18	2	0	3	5	4	0	0	3	0	1	259／133	けつ
0	0	17	1	2	0	3	0	1	0	0	4	1	260／133	心をまどはす
0	0	30	0	2	1	5	0	0	0	0	1	1	260／133	見たてまつりなる
0	0	45	5	1	3	13	0	0	0	0	0	2	260／133	心ひとつ
0	0	25	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	260／133	け遠し
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	260／134	おししほむ
2	0	18	1	4	4	29	1	0	1	0	0	3	260／134	たひらかなり
0	0	9	6	4	15	8	0	2	0	0	0	1	261／134	まだし
0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	2	261／134	人ごと
3	0	29	15	4	1	3	0	0	1	1	0	3	261／134	いひ出づ
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	261／134	顔づくりす
0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	261／134	顔がはりす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	261／135	をぐ
0	0	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	262／136	おほほる
3	0	139	0	0	5	7	2	3	0	0	0	5	263／137	心のうち
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	263／137	笑みほこる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	263／138	うむ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	263／138	くみわたす
1	0	4	0	0	5	3	0	1	0	0	0	2	264／139	たちわたる
0	0	6	0	3	4	0	1	0	0	0	0	1	264／139	しきる
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	265／140	物はしたなし
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	265／140	かかやかし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	265／140	かかやかす
0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	266／141	しぎま
1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	266／141	大かたのこと
0	0	2	0	0	0	8	0	0	0	0	0	2	266／142	たてわたす
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	266／142	しづのを
0	0	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	266／142	さへづる
0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	266／142	色ふし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	266／142	立がほ
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	266／142	いはがくれ
0	0	1	1	1	0	7	0	0	1	0	0	1	266／142	うちむる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	266／142	およびがほなり
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／142	うちかがむ
0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／143	もてつづく
0	0	29	2	5	0	8	0	0	0	0	0	4	267／143	ものものし
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／143	かみのさがりば
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／143	あふぎにはづれたる
0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	267／143	かたはらめ

更級 日記	和泉式部 日記	源氏 物語	枕 草 子	落窪 物語	蜻 蛉 日記	う つ ほ 物語	平 中 物語	大 和 物語	土 佐 日記	伊 勢 物語	竹 取 物語	紫 式 部 日記	(新大系／ 新全集の ページ数)	資料—③
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／143	うれへなく
0	0	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	267／143	ゆゆしきまで
0	0	1	5	2	0	10	0	0	0	0	0	1	267／144	ゐなむ
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	268／144	おどろ
0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	268／144	おほやけおほやけし
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	268／144	おしこむ
0	0	15	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7	268／145	かどかどし
0	0	11	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	268／145	つきしろふ
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	269／145	手をおしする
0	1	8	3	3	3	3	1	0	0	0	0	2	269／146	くちぐち
0	0	33	1	3	0	19	0	0	0	0	0	1	269／146	こころみる
2	8	96	31	4	7	24	1	2	0	1	0	6	269／146	さしいづ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	269／146	こはづかひ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	270／147	すべりとどまる
0	0	38	0	0	0	10	0	0	0	1	0	3	270／147	見しらぬ
0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	270／147	まどひ入る
0	0	14	0	0	0	8	0	0	0	0	0	1	270／147	しなじな
0	0	13	4	1	2	2	0	0	0	0	0	1	270／148	もてさわぐ
0	0	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	270／148	あえか
0	0	36	0	2	1	5	0	1	0	1	0	1	271／148	いとどし
0	0	23	6	0	1	2	0	0	0	0	0	4	271／148	こちたし
0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1	271／148	かけまくも
0	0	13	0	2	0	11	0	0	0	0	0	4	271／148	おくりもの
0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	271／149	こまかにをかし
0	0	5	0	1	0	5	0	0	0	0	0	1	271／149	とりはなつ
0	0	8	1	1	1	3	0	0	0	0	0	1	272／149	つやつやと
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	272／149	おしわたす
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	272／149	見えなす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	272／150	ひきさがす
0	0	7	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	272／150	うつくしむ
0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	272／150	わりなきわざ
0	0	34	0	1	0	4	0	0	0	0	0	2	272／150	心よせ
0	1	25	1	2	4	1	0	1	0	0	0	1	272／150	思ひある
0	0	6	0	2	1	2	0	1	0	0	0	1	273／151	なぞや
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	273／151	思ひかけたる心
0	1	37	2	1	2	8	0	0	0	0	1	3	273／151	もの憂し
0	0	44	3	0	4	5	0	0	1	0	0	1	273／151	思はずなり
1	1	21	2	1	0	1	0	0	0	0	1	1	273／151	嘆かし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	273／151	思ひがひ
0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	273／152	思ひよそふ
0	0	14	3	1	0	1	0	0	0	0	0	1	273／152	さと

更級 日記	和泉式部 日記	源氏 物語	枕 草 子	落窪 物語	蜻蛉 日記	うつ ほ 物語	平 中 物語	大 和 物語	土 佐 日 記	伊 勢 物語	竹 取 物語	紫 式 部 日 記	(新大系／ 新全集の ページ数)	資料—④
2	0	26	1	1	1	1	1	0	0	1	0	2	273/152	かきくらす
0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	273/152	うちさわぐ
0	1	44	3	1	2	8	0	0	0	0	0	2	274/153	心づかひす
0	0	3	1	0	2	1	0	0	0	1	0	1	274/153	たゆし
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	274/153	たゆたふ
0	0	26	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	274/153	なほなほし
0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	274/154	やすげなし
0	3	287	4	6	1	17	0	0	0	2	1	1	275/154	心苦し
2	0	25	0	1	1	2	0	0	0	0	0	3	275/154	夢のやう
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	275/154	もこよひ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	275/154	のだつ
0	0	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	276/155	こきまず
0	1	19	1	0	0	6	0	0	0	0	0	5	276/155	心々なり
0	0	45	0	1	1	0	0	0	0	0	1	4	276/156	まほなり
0	0	7	4	0	0	0	0	4	0	1	0	2	276/156	けさうず
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	276/156	わきまへ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	277/157	着はやす
0	0	10	0	0	0	8	0	0	0	0	0	2	278/158	吹きあはす
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	278/158	心地ゆく
0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	278/158	そぞろ寒し
0	0	6	0	0	3	0	0	0	0	0	0	2	278/158	あへしらふ
0	0	30	1	1	0	1	0	0	0	0	0	4	278/159	もてはやす
0	0	8	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	278/159	ゑひ泣き
0	0	60	9	0	0	10	0	1	0	0	0	4	278/160	ことさらなり
0	2	65	0	29	0	37	0	3	1	0	0	3	278/160	ねたし
0	0	12	0	3	1	0	0	0	0	0	0	2	278/160	うちあふ
1	0	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	3	278/160	明けたつ
1	0	106	5	0	1	10	0	0	0	1	0	3	278/160	にほひ
0	2	113	2	1	4	9	0	0	0	0	0	5	280/161	ことごとし
0	0	11	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	280/161	あはむ
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	280/161	取りさく
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	280/161	あだふ
2	0	9	7	1	0	2	0	0	0	0	0	2	280/162	したつ
0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	281/163	かたじけなくもあはれ
0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	281/163	まうち君
2	1	17	0	0	5	5	1	0	3	1	0	2	282/164	かぞふ
0	0	21	4	3	0	8	0	0	0	0	0	2	282/164	あなずる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	282/164	ざれいまめく
1	1	12	2	0	0	4	0	0	0	0	0	2	283/165	聞きゐる
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	283/165	ひこしろふ
0	0	18	0	0	1	2	0	0	0	0	0	2	283/166	いとはし

更級 日記	和泉式部 日記	源氏 物語	枕 草 子	落窪 物語	蜻 蛉 日記	う つ ほ 物語	平 中 物語	大 和 物語	土 佐 日記	伊 勢 物語	竹 取 物語	紫 式 部 日記	(新大系／ 新全集の ページ数)	資料—⑤
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	283／166	かぞへやる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	284／166	われぼめす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	284／167	さわがしき心地
0	0	5	6	0	1	6	1	0	0	1	0	1	284／167	なめし
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	284／167	うちつぶやく
1	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	285／168	なぞの
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	285／168	もののく
0	3	4	1	14	0	4	0	0	0	0	0	2	285／168	さいなむ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	285／168	ひきうしなふ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	285／168	心もとなき名
1	0	14	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	285／169	ものむつかし
0	0	9	0	0	2	1	0	0	1	0	0	1	286／169	行かふ
1	1	21	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	286／169	思ひわく
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	286／169	そぞろごと
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	286／169	世にあるべき人数
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	286／170	残ることなし
0	0	11	2	0	1	1	0	0	0	1	1	1	286／170	おもなし
0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	286／170	心浅し
0	0	17	1	2	0	4	0	0	0	0	0	1	286／170	思ひおとす
2	1	24	0	3	1	3	2	0	0	2	0	1	286／170	おとづる
0	0	10	0	0	1	4	0	0	0	0	0	1	286／170	おほぞうなり
1	0	9	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	286／170	かき絶ゆ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	286／170	住み定まる
0	2	55	1	0	2	0	0	0	0	0	0	1	287／170	ものあはれなり
0	0	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	287／170	心とむ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	287／170	むつび語らふ
1	1	33	0	0	5	2	3	0	0	0	0	1	287／171	ものはかなし
1	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	287／171	浮き寝
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	287／171	鴨の上毛
0	0	7	0	0	2	2	0	0	0	0	0	1	287／171	うちはらふ
0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	288／172	見えわく
2	5	72	10	3	5	33	0	2	0	0	0	4	288／172	むつかし
0	0	24	3	0	0	1	0	0	0	0	0	2	288／173	たどたどし
7	4	128	14	16	16	34	2	5	0	3	1	5	288／173	語らふ
0	0	5	0	3	2	1	0	0	0	0	0	2	288／173	すくむ
0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	288／173	厚ごゆ
1	1	13	10	2	5	1	0	2	0	1	1	1	288／173	寄り来
0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	289／173	ことなしぶ
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	289／173	思ひおくる
1	0	1	1	0	1	3	0	0	0	0	0	2	289／174	いひつくす
1	1	65	5	0	0	14	1	1	0	0	0	1	289／174	け近し

更級日記	和泉式部日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	蜻蛉日記	うつほ物語	平中物語	大和物語	土佐日記	伊勢物語	竹取物語	紫式部日記	(新大系／新全集のページ数)	資料—⑥
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	290／175	いどみます
0	0	3	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	290／175	あゆみいる
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	290／175	ひたおもてなり
0	0	27	0	0	3	5	0	0	0	0	0	1	290／175	胸ふたがる
0	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	290／175	たをやかなり
0	0	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	290／176	みやびかなり
1	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	290／176	さとぶ
2	0	102	2	9	0	9	0	0	0	0	0	3	291／177	はかばかし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	292／178	歩みならぶ
0	0	33	0	8	2	0	0	1	0	0	0	1	292／178	胸つぶる
3	0	41	0	0	4	0	0	0	0	0	0	1	292／178	心よす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	292／178	目うつる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	292／178	もののけじめ
0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	292／178	心もちる
0	0	18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	292／178	かたくなし
0	0	5	0	0	0	4	0	0	0	0	0	3	292／179	そびやかなり
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	293／179	おもなさ
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	293／180	ほの聞こゆ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	293／180	心にくだつ
1	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	294／181	さだすぐ
0	0	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	294／182	高やかなり
0	0	14	3	0	5	3	0	0	0	0	0	1	294／182	さしおく
1	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	295／182	耳とどむ
1	0	40	0	1	2	0	1	1	1	0	0	1	295／182	うちつけなり
4	0	14	6	4	2	29	1	5	1	2	0	2	295／183	夜ひと夜
3	0	32	0	2	2	8	0	0	0	0	0	2	295／183	ものさわがし
1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	296／184	夢路にまどふ
0	0	45	3	0	0	3	0	1	0	0	1	1	296／184	うとまし
0	0	2	1	0	0	3	0	0	0	0	0	1	297／184	いざとし
0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	297／184	いろめかし
1	0	30	15	0	2	0	0	0	0	0	0	1	297／184	すさまじ
0	0	12	1	2	1	1	0	0	0	0	0	1	297／185	あららかなり
0	0	33	3	1	0	22	0	1	0	0	0	4	299／188	らうらうし
0	0	85	0	0	0	5	0	0	0	0	0	6	299／188	もてなし
0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	299／188	なよびかなり
0	0	25	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	299／188	心はづかし
0	0	46	1	4	0	4	0	0	0	0	0	3	299／189	心ざま
0	0	190	8	7	9	59	0	3	2	2	0	3	300／189	ついで
0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	300／189	ものいひさがなし
0	0	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	300／189	かたほなり
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	300／189	こまめかし

更級 日記	和泉式部 日記	源氏 物語	枕 草 子	落窪 物語	蜻 蛉 日記	う つ ほ 物語	平 中 物語	大 和 物語	土 佐 日記	伊 勢 物語	竹 取 物語	紫 式 部 日記	(新大系／ 新全集の ページ数)	資料一⑦
0	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0	0	1	300／189	びびし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	300／190	ものづつむ
0	0	3	2	1	1	3	5	3	0	0	0	2	300／190	いひつく
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	301／190	そびそびし
0	0	33	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	301／190	あはひ
0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	301／190	ただありなり
0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	301／191	よしめく
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	302／192	かはらかなり
0	0	4	2	1	0	0	0	0	0	0	0	2	302／192	とりはづす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	302／192	人ぐま
0	0	31	1	2	0	0	0	0	0	0	1	3	303／193	心ばせ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	303／193	心おもし
0	0	44	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	303／193	心やまし
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	304／195	あふなし
0	0	17	0	0	0	0	2	2	0	1	0	1	304／195	心に入る
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	304／195	このみだつ
0	0	6	1	0	0	6	0	0	0	0	0	1	304／195	きしろふ
0	1	15	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	305／195	あはあはし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	305／196	ざうずめく
0	0	35	2	2	3	8	0	0	0	2	0	3	305／196	かたはなり
0	0	27	0	1	0	2	0	0	0	0	0	1	306／197	ひがひがし
0	1	9	0	0	0	4	0	0	0	0	0	2	306／197	こめく
0	0	21	2	5	1	14	0	1	0	0	0	2	306／197	知ろしめす
0	0	17	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	306／198	あはつけし
0	0	2	6	2	4	6	0	0	0	0	0	1	306／198	たふる
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	307／199	ひたたく
0	0	17	4	0	1	3	0	0	0	0	0	2	308／200	もどく
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	309／201	なんず
0	0	11	2	0	2	0	0	0	0	0	0	1	309／201	ことわる
0	0	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	309／202	よしばむ
0	1	14	8	0	0	0	0	0	0	0	0	2	309／202	したり顔なり
0	0	9	0	0	4	8	0	0	0	0	0	1	310／203	心すごし
0	0	22	2	0	4	3	0	0	1	0	0	1	310／203	もよほす
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	311／204	よせ立つ
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	311／204	はひ散る
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	311／204	しりうごつ
2	0	14	6	0	4	3	0	0	0	0	0	2	311／204	きらきらし
1	0	24	2	0	3	3	0	0	0	0	0	3	311／204	心地よげなり
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	311／205	口ひひらかす
0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	312／205	ほけしる
0	0	4	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	312／205	そばそばし

更級日記	和泉式部日記	源氏物語	枕草子	落窪物語	蜻蛉日記	うつほ物語	平中物語	大和物語	土佐日記	伊勢物語	竹取物語	紫式部日記	(新大系／新全集のページ数)	資料—⑧
0	0	39	1	3	2	8	0	0	0	0	1	2	312／206	おいらかなり
0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	312／206	くせぐせし
0	0	36	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	313／206	心おきて
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	313／207	なげの情
0	0	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1	313／207	いひ笑ふ
0	0	7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	314／208	しりうごと
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	314／209	才がる
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	315／209	てづつなり
0	0	26	2	0	0	3	0	0	0	0	0	1	315／210	しどけなし
0	0	4	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	315／210	ことわざ
0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	318／214	すずろごと
0	0	16	0	1	2	13	0	1	0	2	0	2	318／214	すきもの
3	2	9	0	0	0	2	0	0	2	0	0	2	318／215	夜もすがら
1	0	12	2	1	0	4	0	0	0	0	0	2	319／215	見もの
1	6	158	14	15	20	17	1	3	0	1	0	5	319／216	わりなし
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	319／216	さいらく
0	0	125	2	8	2	29	2	0	0	0	1	4	320／217	わづらはし
0	0	10	0	4	1	7	0	0	0	0	0	1	320／217	ひがむ
0	0	15	1	2	1	17	0	1	0	0	0	1	320／217	むつかる
0	0	81	8	3	3	23	0	1	0	0	0	2	320／217	さうざうし
2	0	137	4	2	3	36	1	0	0	2	0	2	321／218	ほのかなり
0	0	22	0	2	1	6	0	0	0	0	0	1	321／218	うとうとし
1	0	158	1	5	12	21	0	0	0	0	0	3	321／218	心やすし
0	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	1	3	322／219	けそうなり
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	323／222	聞きはやす